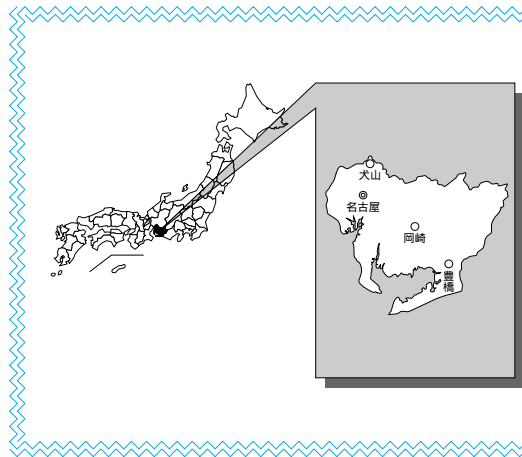


土木紀行

百々貯木場

愛知県豊田市



どうどちよぼくじょう 百々貯木場と江戸時代の 矢作川の水運

陸上交通が未発達で高賃金だった江戸時代、矢作川では、物資の輸送に「川船」を用いた舟運が発達しました。「川船」や「馬の背」による輸送は、海岸部と山間部を結ぶ商業活動に利用されました。また、川の水運は、「川船」による舟運だけでなく、山間部で伐採した材木を筏に組んだり、直接流したりする方法がありました。

矢作川の水運は歴史が古く、豊田市域では、中世期に、平江湊（現平井町付近）と下江湊（現長興寺付近）という川湊があったことが知られていますが、本格的な舟運の発達には江戸時代ごろと考えられます。

矢作川をさかのぼる船は、越戸・古鼠の土場までで、荷はここから陸へ揚げられ、馬の背に積み替えられて飯田街道を足助経由で信州方面・三河山間部へと運ばれました。

川船が河口から古鼠まで行くには、帆を立て、風を利用して、最低2日以上かかりました。一方、下りは1日で下れたそうです。

百々貯木場の役割

川船や筏による水運の発達には、「問屋」の存在が重要な役割を果たしました。問屋は川沿いに「土場（荷物の積み下ろし場）」を持ち、荷物・商

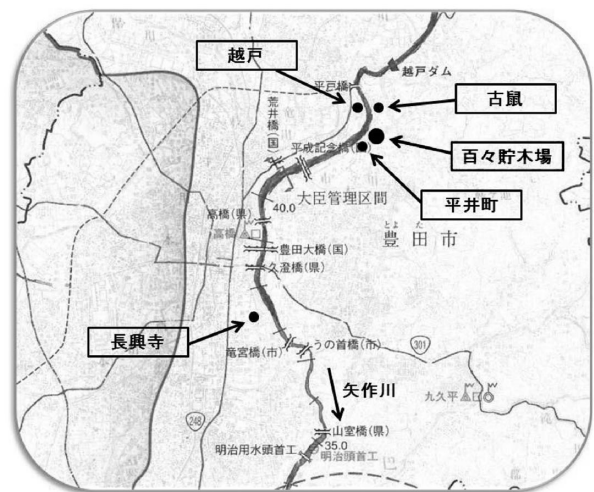


図 1 位置図

品の輸送で利益を得ました。

百々貯木場は、明治～大正初めに活躍した、材木商を営んでいた今井善六によって、買い付けた木材の集積場として建設されました。

彼が水中貯木場を建設した目的は、

- ① 木材を陸揚げすることなく集積できること
 - ② 洪水時の流材を防ぐこと
 - ③ 夏場に木材の割裂を防ぐこと
- などです。

この水中貯木場は大正7（1918）年に完成し、上流に越戸ダムが建設されたなどのため、昭和5（1930）年にその役目を終えました。

現在は、公園として整備され、堤防・樋門・貯水池・木材引上げ用スロープ・滑落場・木材の仕分け用突堤・製材所跡を見ることができます。



写真 1 現在の百々貯木場（上空よりのぞむ）



写真 2 現在の百々貯木場
（堤内地側よりのぞむ）



写真 3 大正7年ごろの百々貯木場
（矢作川対岸よりのぞむ）

《百々貯木場概要》

- ・竣工：大正7年
- ・所在地：愛知県豊田市百々町
- ・敷地面積：6,300m²
- ・貯水池面積：5,000m²

豊田市教育委員会は、平成9（1997）年に貯木場跡を市の文化財 建造物 に指定しました。平成20（2008）年には、土木学会推奨土木遺産に推

奨されました、河川中流域に完全な形で残る貯木場としては、全国的に見ても希有な存在です。

【参考資料】

- 1) 『矢作川の水運～川の道～』豊田市近代の産業とくらし発見館資料
- 2) 『近代化遺産調査報告（河川中流域の水中貯木場跡・百々貯木場 矢作川における木材輸送）豊田市近代の産業とくらし発見館資料